

令和 5 年 6 月 20 日現在

機関番号：34419

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19K00235

研究課題名(和文)人形資料に基づく乙女文楽の芸能史的発展研究

研究課題名(英文) A Developmental Study of Otome-bunraku as Performance Arts, research based on the materials of puppets

研究代表者

鈴木 公子(林公子) (SUSUKI, Kimiko)

近畿大学・文芸学部・教授

研究者番号：50183091

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：1. 乙女文楽の誕生の背景となった当時の人形浄瑠璃界の状況を明らかにした。2. 乙女文楽の歴史を再考察し、現在に至る通史を明らかにした。3. 大阪大学所蔵の乙女文楽人形資料の性質と特徴、また、どのような演目に使用されたかを考察し、明らかにした。4. 乙女文楽の主要な上演場所の一つであった昭和初期の温泉レジャー施設や、また、遣い手であった少女へのまなざしについて考察し、近代芸能、女性芸能としての視点から上演環境についてあらたな考察を加えた。1～4の考察によって、乙女文楽という芸能の持つ創造性と文化的多様性について提示することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究成果の学術的意義は、乙女文楽の誕生の背景、通史を明らかにしたこと、近代の芸能である乙女文楽の上演環境について、また、女性芸能の視点からの考察をおこなったことにある。上記の学術的な成果により、乙女文楽という芸能の姿を通して、芸能の持っている創造的な力やその多様性を具体的に示すことができた点が、本研究成果の社会的な意義であると考えられる。

研究成果の概要(英文)：1. We clarified the situation of the Ningyo-joruri world at that time, which was the background to the birth of Otome-bunraku. 2. We re-examined the history of Otome-bunraku and clarified its whole history. 3. We clarified the characteristics and the uniqueness of the Otome-bunraku puppet materials held by Osaka University, and also tried to shed light to the possibilities of the pieces in which they were used. 4. We added new points of view on the studies of Otome-bunraku, considering to the environment of venues, i.e. the hot spring leisure facility in the early Showa period, as well as the people's gaze towards the girls who were the puppeteers. Through considerations 1 to 4, we were able to present the creativity and cultural diversity of the Otome-bunraku as Performance Arts.

研究分野：歌舞伎史

キーワード：乙女文楽 人形衣装資料 女性芸能 大阪の芸能 近代の芸能 義太夫節 人形浄瑠璃

1. 研究開始当初の背景

(1) - 本研究の学術的背景

乙女文楽は、大正末年に大阪で、通常3人で操る文楽式の人形を1人で操れるように操作機構を工夫考案し、女性の人形遣いが人形を操作する人形浄瑠璃として上演された芸能である。腕金式と胴金式の2種類の操作方法が相次いで考案され、複数の乙女文楽の座が誕生して、大阪のみならず、九州から北海道や外地まで巡業を行った座もあり、戦後の時期までかなりの人気を博した。昭和50年代までは一座としての活動が行われていたが、従来の芸能史研究の中ではほとんど扱われることはなく、言わば忘れられた芸能であった。

しかし、神山彰編『忘れられた演劇』(森話社 2014)が示しているように、近年、特に近代の演劇芸能研究において、ある時期には隆盛を見ながら、その後衰退し、現在では忘れられてしまったさまざまな芸能、従来の観点からすれば周縁的とされてきた芸能に焦点をあて、その実態とその芸能を支えた社会的環境を考察することによって、芸能の多様性と日本の芸能における近代という問題を考察しようとする研究が盛んになってきた。乙女文楽もまた、そうした考察の対象となる芸能の一つである。

大阪大学には、昭和40年代まで公演を行っていた「大阪娘文楽座」という乙女文楽の一座のものとして伝えられる人形衣装・胴、背景幕、小道具等の総数500点におよぶ資料が所蔵されている。30年ほど前に文楽研究者の故吉永孝雄氏から寄贈を受けたものであるが、周縁的な存在であった乙女文楽を専門とする研究者の不在から、一定の整理がなされただけで、長く芸能史的な検証が行われることなく保管されてきた。

本研究研究代表者は、平成28年度より30年度まで、文楽、人形浄瑠璃、義太夫節、近代の芸能、大阪の芸能、女性芸能、芸能環境といったテーマを専門とする研究者によって構成されたメンバーにより、科学研究費基盤研究(c)16K02349「人形衣装調査を中心とした乙女文楽の総合的研究」を得て、初めて、対象資料についての本格的な整理・調査、乙女文楽関係者への聞き取り、文献調査を行い、資料の性質について分析に着手。その結果、明らかになってきたのは、対象資料の性格の解明は、研究着手以前に想定されていたような、「大阪娘文楽座」という一座の来歴を文献等で跡づけることで、その性格と来歴が明らかになるというような単線的な方法では不可能であるということである。大正末期の乙女文楽誕生期に、二つの異なる人形操作方法が相次いで考案され、いくつかの一座が各地で公演を行い、やがて衰退して終焉を迎える乙女文楽の歴史的な経緯全体を、対象資料は言わば象徴しているものとして、複合的に捉えなければならぬことが判明した。

乙女文楽についての先行研究としては、乙女文楽固有の人形操作方法に主に焦点をあてた、杉野橋太郎「特殊一人遣としての『乙女文楽』」(1970)、清水可子「乙女文楽考」(1978)、土井順一「乙女文楽の研究」(1995)、宇野小四郎「乙女文楽の歴史と操法」(1996)があって、乙女文楽の2種類の一人遣いの人形操作方法について、また、それぞれの操作方法の系譜について知る上で、たいへん参考になる。一方、女性による芸能という点に焦点をあてたものとして、乙女文楽の担い手であった女性へのインタビューに基づく、神田朝美「乙女文楽とともに生きる」(2011)「女性人形遣いのライフヒストリー：乙女文楽の変遷をたどる」(2012)があり、乙女文楽の技法の継承者について、また乙女文楽の座の歴史的経緯を知る上で貴重である。また、国立劇場では昭和47年、54年に「民俗芸能公演」として、昭和57年には「民俗芸能鑑賞公演」として、乙女文楽の上演を行っており、公演の貴重な映像資料が残っている。しかしながら、これらの先行研究では、歴史的経緯についての記述がそれぞれで相違している部分もあり、乙女文楽全体の歴史に関しては未だ不明な点も多い。乙女文楽の歴史を明らかにするためには、1920年代～60年代という時代の中での乙女文楽の理解が不可欠であり、従来の乙女文楽のみを対象とした研究ではなく、近代の日本における女性の芸能という観点や、乙女文楽を支えた近代日本の芸能の社会的環境についてのより広い視野からの考察を行うことが重要である。

2. 研究の目的

本研究は、大阪大学が所蔵する乙女文楽の人形衣装・人形胴等資料(以下、阪大所蔵人形資料。現在は大阪大学総合学術博物館の所蔵。)の性格を多角的な分析を通じて読み取り、この資料が物語る乙女文楽の上演実態の歴史をその社会的環境にも注目して、芸能史的な立場から発展的に解明することを目的とする。大正末期に考案され昭和後期まで興行が行われていた乙女文楽が周縁的な存在の芸能であることや女性芸能であることは、近代の芸能を考える上での重要な視座を与えるものである。

本研究では、乙女文楽に密接に関わるテーマを専門とする研究者および芸能の社会的環境の研究を専門とする研究者の共同研究により、人形資料、文献資料、聞き取り調査によるデータを総合的に分析し、乙女文楽の歴史を明らかにし、乙女文楽を通して、近代における日本の

芸能を芸能史的に考察し、その成果を公開することで、近代の日本における芸能の多様性と芸能を支えた文化的土壌の豊かさを示すことを目的とする。

3. 研究の方法

(1) 本研究開始時点までの阪大所蔵資料の第1次データベースの作成過程から必要性が明らかになった、より詳細な資料調査を行い、第2次データベースを作成し、阪大所蔵資料の分析の基盤を築き、より詳しい分析をおこなう。

(2) 大阪大学以外に所蔵されている乙女文楽関係資料の調査をおこなうとともに、乙女文楽関係者に聞き取り調査を行って、さらなる乙女文楽人形資料の所在を探り、(1)のデータに追加して、より多様な資料を含むデータベースを作成し、乙女文楽の人形資料の分析をおこなう。

(3) 乙女文楽を芸能史的に考察する上で重要な諸テーマについて、広範囲に文献資料を中心に調査、分析する。

(4) (1)(2)の調査結果と(3)の文献資料を総合的に考察することで、乙女文楽の誕生から現在に至る歴史、上演の社会的環境を再考察する。

4. 研究成果

(1) 乙女文楽誕生の背景

大正末年から昭和初期に一人遣いによる人形=乙女文楽が誕生した背景には、当時の人形浄瑠璃界の状況があったことを指摘することができる。大正10年に国内の常打ちの人形浄瑠璃座が文楽座のみになって公演数が減少し、一座所属の太夫・三味線・人形遣いは本来の実力に見合う舞台を務めることが困難な状況になっていたこと、その中で、太夫・三味線が、当時非常に隆盛であった素人浄瑠璃の指導に活路を見いだすことができたのに対し、従来から太夫・三味線に比べて活動の場が限られていた人形遣いは、素人義太夫の浄瑠璃会への人形導入の需要に呼応して考案された一人遣い人形に可能性を見出し、少女達を組織して活動をおこなっていったと考えられる。

(2) 乙女文楽の歴史を再考察し、現在に至る通史を明らかにした。

乙女文楽は、その誕生期に3つの座が相次いで生まれ、活動を行っていった。腕金式の人形機構を考案した林二輝(二木)の一座、そこから別れた井上政次郎の娘光子を中心とした一座、さらに井上政次郎の一座を指導していた文楽の人形遣い桐竹門造が、一座の少女達を引き抜いて独立した、胴金式の人形機構による一座である。先行研究によって示された乙女文楽誕生期について、井上政次郎の腕金式人形機構の実用新案出願資料などの新資料を含めて、再考察を加えた。

これらの座では少女たちが昭和10年代まで活発に活動を行った。桐竹門造が組織し、息子の片山栄治に経営を委ねた一座は、文楽から数年間離脱して活動をおこなった新義座の舞台に出演し、外地を含めた多くの公演に同行している。

遣い手の少女たちが成人して活動を辞めたり、また戦局の拡大に伴って、乙女文楽の活動も困難になっていったが、戦後は、片山一座で活躍していた桐竹信子、智恵子姉妹の父である宗政太郎が、疎開していた出身地の福岡で一座として活動を始め、昭和27年に神奈川県茅ヶ崎に移住して関東を中心とした巡業活動を行った。宗政太郎の死後、桐竹智恵子は神奈川県内の次世代への伝承を活動の中心に移し、昭和45年には平塚市に人形首衣裳一式を譲渡、昭和47年からは平塚市の囑託となって高校のクラブ活動を指導した。現在では娘のあづま、孫の祥元がその活動を受け継いでいる。桐竹智恵子は、昭和42年から、川崎市を本拠地とする人形劇団「ひとみ座」の女性座員たちにも胴金式の乙女文楽の操法を伝え、指導した。「ひとみ座」座員の活動は「ひとみ座乙女文楽」として、独自の工夫を加えつつ、現在に至るまで定期的な公演普及活動を行っている。

大阪では、戦後、女流義太夫の三味線であった豊澤竹千代が、「成竹座」という一座を組織し、戦前の乙女文楽の人形遣いを集めて興行を行った。この一座では胴金式の人形遣いと腕金式の人形遣いが同座していた。また、柴田亀次郎も終戦前後から「大阪娘文楽座」を主宰し、「成竹座」解散後はその道具類を引き継ぎ、全国を巡業した。昭和44年に解散した「大阪娘文楽座」の人形首衣裳道具類は文楽研究者の吉永孝雄に譲渡された。のちに吉永孝雄から大阪大学に寄贈された衣裳類を中心とした資料が本研究の研究対象の人形資料である。12歳で「成竹座」に出演していた桐竹京子は、昭和30年からは熱海で力弥を名乗り、女流義太夫の由良之助と組んで、座敷で乙女文楽を上演する「一文楽」の活動を始め、由良之助の没後も、平成28年に亡くなるまで人形遣いとして活動を行った。

そのほかにも、林二木の一座にいた山下富子と夫の山下南幸が組織した「南幸座」は大阪を中心に活動を行い、昭和54年には国立劇場民俗芸能公演「一人遣い人形のさまざま」で「壺坂観

音霊験記」を上演している。

この国立劇場の公演にも出演していた吉田光子は、仏教芸能研究者の土井順一に依頼されて、相愛女子短期大学の文楽研究部の指導をおこなうようになり、平成4年に始まった公開講座の参加者を中心に平成6年には吉田光子を座長とする「乙女文楽座」が結成され、関西を中心に公演活動を行った。吉田光子没後も座員たちが今日まで公演・普及活動を続けている。また、「乙女文楽座」から独立した吉田光華は「光華座」として義太夫節作品にとらわれない、自身の日本舞踊の素養を行かした作品の創作を始めとする幅広い活動を精力的に行っている。

(3) 大阪大学所蔵の乙女文楽人形資料の性質と特徴、上演された演目の可能性を明らかにした。

(2) でも述べたように、阪大所蔵人形資料には、その性格を示すような記録類等は含まれておらず、来歴が不明であった。その詳細は未だ明らかではないものの、昭和初期から約半世紀の間の大阪の様々な乙女文楽の座の消長を集積したものであると考えられる。

阪大所蔵人形資料のほとんどは、「大阪娘文楽座」と墨書された木枠付きの行李に収められており、終戦前後から乙女文楽の一座を率いた柴田亀次郎の「大阪娘文楽座」所蔵のものであったのだが、その中に「大正橋 人形 井上」と書かれた世話屋体の道具幕があり、これは井上政次郎一座のものであったものと考えられ、「大阪娘文楽座」所蔵の道具類には乙女文楽草創期のものも含まれていることがわかる。この道具幕以外にも、大正末期から昭和初期に『浄瑠璃雑誌』に広告を載せていた店の墨印のある肩衣の裏打ち紙があり、同様の事実が窺える。

阪大所蔵人形資料の人形衣裳は、文楽の人形衣裳と同じ仕立て方がなされていて、文楽の人形衣裳を踏襲していることがわかる。胴に衣裳を着付けた拵え済みの形で保管されていたものが多い点は、巡業公演が主であった乙女文楽の一座の上演慣習との関係が考えられる。

阪大所蔵人形資料の人形衣裳は、現行の文楽の人形衣裳とは色や柄などが合致するものはほとんどなく、衣裳から上演演目を確定することは困難である。しかし、小道具からは、「仮名手本忠臣蔵」四段目、六段目、「新版歌祭文」、「加賀見山旧錦絵」の上演がわかり、また、襟印のついた雁木模様の羽織から「義士銘々伝 赤垣源蔵出立の段」、上着に書状が書かれた子役の僧衣から「天網島時雨炬燵」の上演がわかる。また、現行文楽の衣裳との比較によって推定される上演演目としては「御所桜堀川夜討」弁慶上使の段、「三番叟」がある。

逆に、『浄瑠璃雑誌』に掲載された公演記録や番付、プログラムから、昭和2～7年の乙女文楽草創期、新義座の公演を中心とした昭和11～14年、戦後、の上演演目一覧を作成し、所蔵衣裳で、これらの演目に使用可能なものを探ると、丸胴に襦袢と着付を肌脱ぎができれば着付けた拵え済みの衣裳は「義経千本桜」鮎屋の段の権太に、白地の襦袢の袖に「南無阿弥陀仏」と書かれたこれも拵え済みの衣裳は「一谷嫩軍記」の熊谷陣屋の段の弥陀六に、6面ある御簾の小道具や子役の桃色縹子の袴は「伽羅先代萩」の御殿の段に用いられたとみてよいと考えられる。その他にも「菅原伝授手習鑑」「絵本太功記」「本朝廿四孝」「碁太平記白石噺」「壇浦兎軍記」「絵本合邦辻」「伊賀越道中双六」「三十三間堂棟木由来」「壺坂観音霊験記」「正写朝顔日記」「近頃河原の達引」「艶容女舞衣」「恋娘昔八丈」などの上演に用いられた可能性が考えられる衣裳がある。特定の演目を想定することが難しい衣裳も多く、また、失われたものもあるだろうが、阪大所蔵人形資料は、乙女文楽が昭和初期から戦後を通じて高い人気のあった時代物作品を中心とする多彩な演目を上演してきた歴史を反映しているものであることがわかる。

また、阪大所蔵人形衣裳には、大正末期に生まれた芸能ならではのモダンな生地が巧みに使われているものがあり、それも特色であると言える。ネル地やウール地、化繊などの生地が使われているだけでなく、薔薇模様のプリント生地が襦袢に用いられていたり、洋風の柄をうまく古典の衣裳として用いているものもある。着物の伝統を生かした、着付や羽織の裏地に大胆に洒落た生地を使った衣裳もあり、衣裳を仕立てた乙女文楽の座の人たちの愛情と熱意が伝わってくる。

(4) 乙女文楽の主要な上演場所であった昭和初期の温泉レジャー施設や、遣い手であった少女たちへのまなざしについての考察を通じ、近代芸能、女性芸能という視点から、乙女文楽の上演環境について考察を加えた。

昭和初年の乙女文楽の主要な上演の場は、大阪新世界のラヂウム温泉で行われていた素人義太夫の公演であった。ラヂウム温泉で上演されていた芸能を『大阪朝日新聞』に掲載された広告から調査すると、喜劇、剣戟、レビューなどの気軽にみられるものが、温泉にやってくる客の娯楽として親しまれていたこと、かなりの数の劇団が入れ替わりで興行をおこなっていたことがわかる。乙女文楽はその中でも人気が高く、ラヂウム温泉常設の一座として定着していた。人気の一因には遣い手の少女たちの容姿も関係していた。当時、温泉レジャー施設では、少女歌劇やさまざまな芝居や、見世物や花火などが行われており、ラヂウム温泉の乙女文楽は、こうした温泉施設と結びついた芸能であると同時に、当時盛んに行われていた少女の芸能という特徴を併せ持つ芸能であったことがわかる。

乙女文楽は文楽をもとに新たな操作機構を考案した、それまでにない一人遣いでの人形

浄瑠璃であったが、草創期の文献資料の記述からは、新たな一人遣いであることよりも、その遣い手が可愛い幼い少女であることが注目されていたことがわかる。乙女文楽が定着するにつれて、芸の巧拙や女性の遣い手ならではの長所や、一人遣い人形としての可能性なども言及されるようになるが、可愛いらしいという評価のまなざしからは逃れられなかった一面を持っていた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計1件

| | |
|--|-----------------|
| 1. 著者名 乙女文楽研究会（林 公子、後藤 静夫、横田 洋、澤井 万七美、中尾 薫、廣井 榮子、土田 牧子） | 4. 発行年 2023年 |
| 2. 出版社 大阪大学出版会 | 5. 総ページ数 108 |
| 3. 書名 乙女文楽－開花から現在まで－ | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

| |
|---|
| <p>大阪大学総合学術博物館 第15回特別展 「乙女文楽 &#8212;開花から現在まで&#8212;」 https://www.museum.osaka-u.ac.jp/2021-09-30-15557/</p> |
|---|

6. 研究組織

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|-------|--|--|----|
| 研究分担者 | 土田 牧子 (TSUCHIDA Makiko) (30466958) | 共立女子大学・文芸学部・准教授 (32608) | |
| 研究分担者 | 中尾 薫 (NAKAO Kaoru) (30546247) | 大阪大学・大学院人文学研究科（人文学専攻、芸術学専攻、日本学専攻）・准教授 (14401) | |

6. 研究組織（つづき）

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|-------|--|---|----|
| 研究分担者 | 後藤 静夫 (GOTO Sizuo) (50381926) | 京都市立芸術大学・日本伝統音楽研究センター・名誉教授 (24301) | |
| 研究分担者 | 横田 洋 (YOKOTA Hiroshi) (50513115) | 大阪大学・総合学術博物館・助教 (14401) | |
| 研究分担者 | 澤井 万七美 (SAWAI MANAMI) (60330726) | 沖縄工業高等専門学校・総合科学科・准教授 (58001) | |

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|-------|---------------------------|-----------------------|----|
| 研究協力者 | 廣井 榮子 (HIROI Eiko) | | |

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
| | |